

# 未来の原風景 - 暮らしを紡ぎ再構築する丘の景色 -

加藤綾菜 茨城大学・工学部・都市システム工学科

建築概要  
用途：集合住宅  
住戸数：39戸  
延床面積：3970㎡  
階数：1階  
構造：木造



## 01. 背景

### 地方住宅団地の現状

日本地方部外では、高度経済成長期に伴い、山や丘陵地を開拓し次々と住宅団地を形成した。多くの家族世帯が同居し、団地内は活気に溢れた。しかし、少子高齢化が進んだ現在、若者は進学や就職のために団地を出ていき、残された多くの住民は高齢化していく。丘陵地に形成された住宅団地は、中心部から離れており、インフラに依存した生活が必要となる。



### コンパクトシティの取り組み

少子高齢化が進む現在、各地方では「コンパクトシティ」が浸透しつつある。「コンパクトシティ」とは生活機能を中心部に集約し、持続可能なまちづくりを目指す都市モデルであり、市の中心部から離れた住宅団地に住み続けることは、インフラ整備や空き家管理など様々なリスクが伴う。

しかし多くの住民が、中心部にはない町の静けさや自然の豊かさ、町への愛着を理由に、中心部へ移動することなく自分の町に住み続けている。そこで私の卒業設計では、分譲化した住宅、増加し続ける空き家・空き地が見られる縮小化が進行している住宅団地での暮らしに焦点を当て、未来の原風景へと紡ぐ、持続可能な住まい方を追求してみることをする。

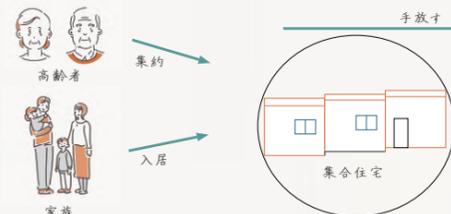
## 02. コンセプト

市の中心部へ移動せずに、これからもこの地で住み続けることはできないのか？



### 暮らしを紡ぐ未来の原風景

1人で住むことに対して不安を抱えている高齢者や、一度団地を離れたが帰ってきた人、家族などが、この地で小さく集まって住まうことで、共に自立的に暮らしを紡いでいく住まい方を提案する。手放した住宅は、暮らしの痕跡として丘の風景を再構築する資源となり、過去の暮らしを紡いでいく。集まって住む住宅、そして残された暮らしの痕跡が張り巡る丘の景色は、団地の未来の原風景となる。



集まって住むことで、インフラに依存しない暮らしを、協力して行っていく。インフラに頼り過ぎない暮らしは、縮退した未来でもこの地で持続的に暮らすことを可能にする。住宅跡地に残る暮らしの痕跡を利用した循環型の暮らしに繋がる仕組みを周囲に分散させ、周囲の風景を巻き込みながら自立した暮らしを目指す。



## 03. 原風景モデル

### 現在の原風景



### 未来の原風景

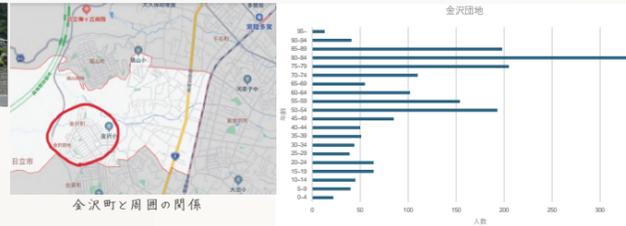


#### 04. 対象敷地



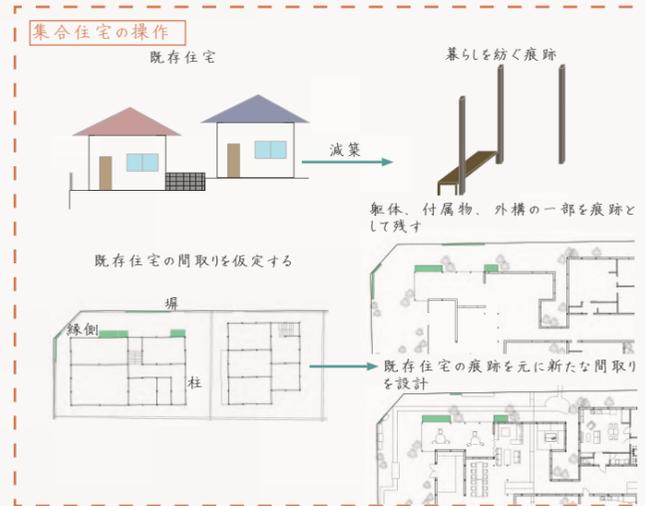
敷地概要  
敷地面積：10733㎡、既存住宅27戸

1962年-1981年に山側丘陵地を開発して形成された住宅団地、約5599戸の分譲住宅が建設された。また2013年に山側道路が開通し、山側道路の車や歩行者の数は増加している。人口の半数が高齢者であり、およそ30年後には半数の人口になることが予想される。団地内には空き家や空き地が放置されている。中心部には、住宅と一体化した書店、郵便局、閉店した食堂があり、集会所、理容院、店舗が並び、幼稚園跡地も残る。全沢団地の中心部であり国道6号からの直結する場所であるため、この場所を中心に新たな住まいの構築をしていく。

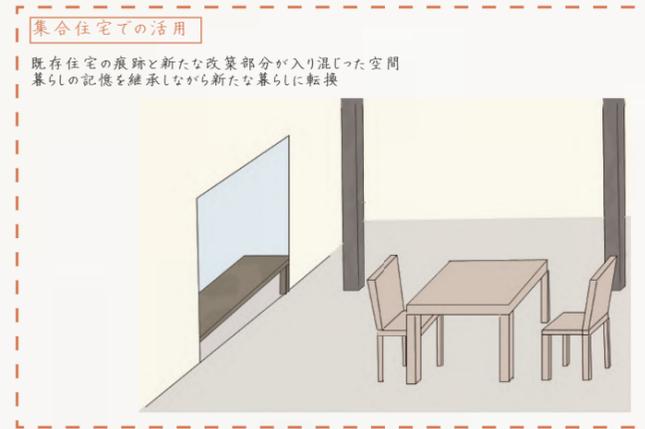


山側道路と国道6号線に挟まれている。当陸多賀駅から車で約15分、バスで約20分の場所に位置する。6号に行くまでにスーパーや多くの病院があり、基本的な暮らしが可能。  
65歳以上の高齢者が952人  
0-19歳が171人  
→少子高齢化がかなり反映  
50代が高齢者の次に多い  
→子供の時に引越してきた人がそのまま残っている  
30年後の未来↓  
・人口が半減  
・今の50代が高齢者に

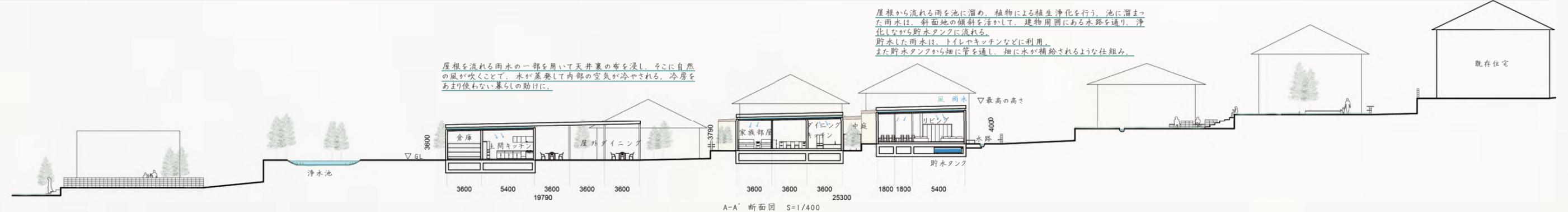
#### 06. 暮らしの痕跡の残し方



#### 07. 痕跡の活用

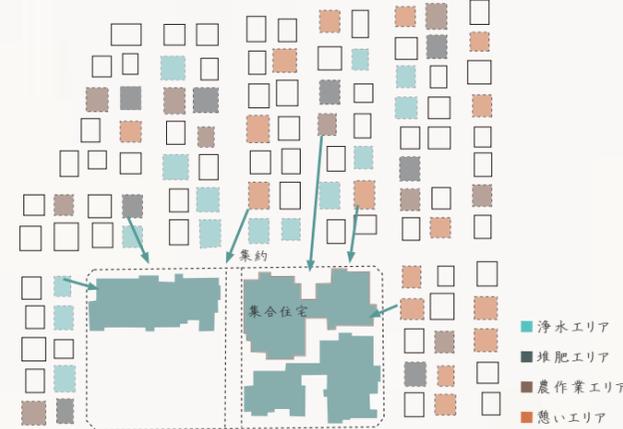


#### 09. 断面計画



#### 05. 暮らしを紡ぐ仕組み

既存の住宅解体→跡地=循環型の暮らしを支えるエリアへと変換



#### 08. 全体計画



10. 平面計画



浄水エリアの外観イメージ



農作業エリアの外観イメージ



A棟の外観イメージ



A棟の内観イメージ